

第177号 発行日 平成23年10月7日

合格通信

今
月
の
名
言

歴史は単なる過去でも単なる永遠でもない、寧ろ我々の現在を支えるものである。

矢内原 伊作
(『小林秀雄論』)

これは、塾生のみなさんと、特進スクールを訪れてくれた、小中高校生の皆さんとお問い合わせいただいたお父さん、お母さんに向けて、勉強法や受験に役立つ話題をお届けする情報誌です。

大学講義篇 仏文講読5



文学部時代1,2年のとき「試験さえ受ければ単位は取れるだろう」と、少しさぼってしまい、4年になっても週に何回か学校に行くはめになりました。同級生たちは3年目で早々に卒業に必要な単位をとって就職活動に専念していて、同じクラスの人たちからは「阿部君卒業できんの?」とか他大学の友人からは「4年なのに何でそんなに学校に行ってるの?」とか言われていました。

その4年目に履修した科目の一つに「フランス文学講読5」という授業がありました。担当は60代なかばと思われるおじいさん、I助教授でした。(いまでいう准教授)この授業はポール・ヴァレリーという詩人の作品を解説した本を原書で読んでいくもので、毎回指名された生徒が一定範囲を訳して、その内容を先生が補足説明していくというものでした。4年ですから当然出席している生徒が少なく毎回2~3人ですぐに役が回ってきて大変でした。その3人とは僕以外には神戸出身のIさんという女子と5年目の留年している先輩男子でした。あるときIさんの担当が終わり、助教授が「じゃ来週は阿部君何ページから何ページまでやってきて」というので教科書に印をつけようとしたら、そこはなんとその日にやったところでした。(おかしいな、復習して来いということか?)と解釈しもう一度そこをやって次週出席しました。助教授「今日は阿部君当たってたね、そこ読んでみて」といいうので、恐る恐る読んでみると「**きみ、そこ先週やったでしょ!**」僕(やられたか)助教授(怒気を含んだ声で)「きみ、先週出てたんじゃないの!」さらに(Iさんに向かって)「**Iさん今のところ先週やったよね**」Iさん「**はい、やりました**」このIさん、砂かけばあみみたいな顔してどこが神戸なんだとずっと思っていました。

「じゃ今日は僕がやとく」と助教授が訳しました。次の週は間違いなく次のところを僕が当てられ、そこを念入りに調べ上げ発表し、今度は「**そこまで調べてきたの**」とお褒めの言葉を頂きました。しかもこの科目の成績は意外にも「A」でした。